

RCAST

Research Center for Advanced Science and Technology NEWS

98

2017
VOL.1

RCAST Cross Talk 喧研講学 最終回

先端研にしかできない先端研究

中村 尚 教授 × 神崎 亮平 教授

先端研探検団II file 19

オーラル・ヒストリー： 人の記憶を記録する

情報文化社会分野 御厨研究室

Relay Essay 先端とは何か 第21回

“先端”とは、未来との接点である

知的財産法分野 榎田 祥子 准教授

輝け！未来の先端人

玉置 亮 さん



先端研 30th
ANNIVERSARY

東京大学先端科学技術研究センター

ケン ケン ガク ガク
喧 研 譎 学

[最終回]

広報委員長
中村 尚 教授

所長
神崎 亮平 教授

先端研にしかできない先端研究

2014年からスタートした異分野研究者対談も、ついに最終回。昨年12月には、広報誌に掲載しきれなかった対談内容を完全収録した書籍『ブレイクスルーへの思考 東大先端研が実践する発想のマネジメント』が出版されました。先端研究とはどうあるべきか。先端研が附置研究所であるにも関わらず大学院を持つ理由とは。2014年から始まった対談を振り返りながら、研究者として、運営側として、所長と広報委員長が先端研の今とこれからを語り合いました。

■ 気候変動科学分野 中村 尚 教授

Hisashi Nakamura

1960年神奈川県生まれ。1990年6月ワシントン大学大気科学科博士課程修了。Ph.D.。プリンストン大学客員研究員、東京大学理学部助手、東京大学大学院理学系研究科教授を経て、2011年4月より東京大学先端科学技術研究センター教授、2016年より副所長、広報委員長、先端研30周年事業実行委員長。亜熱帯・中・高緯度域の大気循環の特性を、海洋との相互作用という観点から再検証したプロジェクト『気候系のHot Spot』を推進するなど、精力的に研究を展開している。



Ryohei Kanzaki

生命知能システム分野 神崎 亮平 教授 ■

1957年和歌山県生まれ。1986年筑波大学大学院生物科学研究科博士課程修了。理学博士。アリゾナ大学博士研究員、筑波大学教授、東京大学大学院情報理工学系研究科教授等を経て、2006年東京大学先端科学技術研究センター教授、2016年4月より所長。生物の環境適応能(生命知能)の神経科学に関する研究に取り組み、特定の匂いを検出するセンサ昆虫や昆虫操縦型ロボットなどの研究が注目されている。

ショートカットではなく「本物」を

神崎： いよいよ最終回になりました。この対談は、2014年に広報誌を刷新した時に、先端研の研究をわかりやすく紹介するコンテンツの一つとして始まり、昨年末、『ブレイクスルーへの思考』という1冊の書籍になりました。これまでの12人の対談を通して、一見すると全く異なる目的で研究が行われ、その方法や思考が多岐にわたっていても、共通する見方があるんだと思いまし

た。それがまさに、私が3年間の対談で感じ続けていたことなんです。

中村： 随分いろいろな分野の先生と話されましたね。

神崎： ええ。理系、文系、バリエーション分野と多岐に渡るお話を伺えました。分析、統合、構成、そしてシミュレーションという方法論や、要素と全体という捉え方は、理系文系を問わず共通していました。物事を考えていく上では普遍性があり、どの分野の研究者も、そこから実に多様なやり方でブレイクを生み出してき

たという印象を持ちました。

中村：世の中はすべて複雑系ですから、そうした捉え方が必要になるのでしょうか。

神崎：中野所長から西村所長に代わる際の対談で、私がインタビューを行ったんです。そのときに「先端研究は、難しく世の中に伝わらないようでは意味がない」という話が出て、これは非常に重要だなと思いました。中村先生がメディアで解説される機会が多いのは、わかりやすく伝えられるからですよ？

中村：何と言いますか…慣れるまでに時間がかかりました。やはり研究者としては、どうしても本質的な部分を説明したいんです。だけど、それでは一般の方には通じにくい。

神崎：サイエンスとして、簡単な言葉だけでは表現できない部分が多いのも事実です。

中村：ええ。それをやろうとすると、シンプルで見栄えが良だけの図を作るとか、変な方向へ行ってしまう可能性があります。

神崎：研究をショートカットで簡単に世の中に伝えて世間受けを狙う方もいますが、それは問題で、やっぱり基礎がきちんとしたサイエンスでないといけません。そう思うからこそ私は所信表明で「盤石な基礎の上に応用、そして社会実装」と伝えたわけです。問題が起こったとき、基礎がしっかりしていないと、その原因に立ち返ることは難しいと思います。問題ごとにパッチを当ててその場でうまくやればよいという考えでは、本質に到達しない科学や技術が生まれることになります。先端研究は人や社会と密接に関係するフィールドですから、その責任は重いです。このことは、先端研の特に若手研究者教育ではしっかりとしておくことが必要ですね。

中村：いわゆる「本物」を出せるかですね。その土台を作るのが博士課程からポスドクの時期です。少なくとも学位取得時には、自身の論文はその分野の最先端でなければいけない。全体を俯瞰し、自分の研究の価値を第三者に向かって相対的に説明する力がなければ、その先には行けないんです。

なぜ、研究所なのに大学院を持つのか

神崎：先端研には先端学際工学専攻(博士課程)があり、半数以上が社会人学生です。一概には言えませんが、企業などで鍛えられている研究者は、基礎科学を深掘りするより応用や特許取得などが主流ですよ。そういった社会人に先端研として「基礎をしっかりと学べば応用に役立つ」という筋の通った再教育を行うことは、社会にとっても重要なことだと思っているんです。科学には体系があり、一部の領域を深掘りするだけではそのつながりは見えてこない。科学や技術を体系的に学べるのが大学だと思います。

中村：実際に、企業の研究者が学位論文を書くとき所属企業のセールスのようになっていることが少なからずあります。学術論文で

は、自分の研究が同じ分野の中でどの位置にあり、どこまでがわかっているかがわかっていないのか、技術の場合には何がブレイクスルーなのか、という見解が必要なのです。単に他社製品との比較ではなく全体を俯瞰する力があれば、その次の展開も全く変わってくると思うんです。

神崎：そう。ドクターは何が違うかといえばそこが大きいですね。俯瞰し、体系的な理解ができて初めて人に教えたり、指導ができる。狭い領域だけだと難しい。さらに言えば、現代社会の課題はあまりに大きくかつ複雑すぎて、1人のスペシャリストだけでは解決できない課題ばかりです。ところが、もし、その人が多様な分野について俯瞰できる力を持っているとするならば、問題解決の方法は大きく変わる可能性があります。先端研の尖り方は一つだけに特化して尖っているわけではないですよ。すぐ近くに異分野があり、それを知ることができる。それを吸収しながら自分たちもさらに尖ることができる。

中村：本郷も他の附置研究所も、多くの場合は自分の専門を持ってその中で尖ろうとする。下手をすると、周りが見えなくなってしまうんですね。その危険性をよほど強く意識していない限り。一方、先端研にいと他の分野の尖りをいやでも常に意識させられてしまいます。

神崎：これは教育上も非常に重要で、2011年に福島原発事故が起こった際、全体を俯瞰しながら解決にあたる人材がないという課題が露呈しました。先端研は当時から学生の教育に対して異分野との交流や融合を重視してきました。最先端研究を行う異分野が近くにあり、異分野の研究者と交流できることは、研究に関してだけでなく人材育成においても大きな意味を持ってきたと思います。

中村：私は先端研に来て5年半余りになりますが、最初のカルチャーショックは、本郷では遠くにある異分野がすぐそばにある環境でした。最近ではもう当たり前になりましたけど。

神崎：私も初めは、例えば厨厨先生¹⁾と何を話せばいいかわからなかったですよ(笑)。社会科学という分野は私の研究からはかけ離れた分野と思っていましたから。今は感謝しかないですね。このような先端研の環境は、研究者だけでなく学生、特にドクターを持って社会へ出て、先端研究のリーダーとしてがんばらなければいけない人には、またとない環境だと思います。



▲今までの対談を振り返って感じたことを話す神崎所長

研究分野が違って、必ず共通項がある

神崎：さまざまな分野が共存しているのが、先端研の大きな特徴のひとつですが、先端研自体が安定期に入ったとか、研究が小さくまとまったんじゃないと言われることもあります。しかし、40研究室以上ものさまざまな分野が共存し、異なる分野の研究者といつでも意見交換できる環境は得難いものです。このような異分野の融合からいかにイノベーションを創出するかはそう簡単なことでありませんが、異分野が近くにあることは、重要な、そして、いつも刺激的な環境を作ってくれています。

中村：その通りですね。

神崎：異分野の協力ということでは、例えば東日本大震災や熊本地震のような出来事が一つのライビングフォースになっています。あることをきっかけに一つの目標ができて、そこにさまざまな分野の研究者が集まる。先端研の『震災アーカイブプロジェクト』*2がまさにそうです。しかも、きっかけを作っているのが、御厨先生や牧原先生*3という文系の先生方であることが、先端研の面白いところです。

中村：先端研の文系、特に御厨先生や牧原先生の何がすごいかなと言えば、やっぱり発信力です。

神崎：しかも国に太いパイプを持っておられます。安全・安心、持続的に発展可能な社会をいかに築くかという課題は、まさに第5期科学技術基本計画にある『Society5.0』にも直結しています。自然環境や社会構造の変化にいかに対応するかという社会課題に対して、先端研が文理融合で考えていく。これはこの先10年、20年と先端研に求められていることと私は思っています。

中村：『震災アーカイブプロジェクト』は先端研の分野横断プロジェクトですが、あれはもう単なる文理融合を超えている感じがします。

神崎：その『震災アーカイブプロジェクト』で、身体情報学、バリアフリー、生命知能システム、政治行政システムなど異なる分野の先生方と一緒に熊本に現地視察に行ってきました。御厨先生のご紹介で蒲島知事ともお会いして意見交換もできました。その後、先端研でそれぞれの研究から何ができるかをディスカッションしたんですが、そのとき「なんだこれ、すごい！」と思ったんですよ。本当に。震災・復興という共通したテーマに対して、みんな違った切り口からこんなに面白いことを考えられるんだ！と。あの感覚は、まさに喧研謔学で行ってきたインタビューを通して私が感じた興奮と同じだったんです。1+1=2ではなく、もっともつといるんなことが起こる。「先端研は安定したね。小さくまとまったね」と言われることもあるのですが、私は「一粒一粒がピリリと辛いんです」と返しています。ピリリと辛くな

ければ、こんなシナジーは起きないと思います。そういったディスカッションの場で「分野の違う話ですね」と静観するのではなく、「へえ！」と感動する人は、その根底に共通項を感じ取り、融合研究のパートナーとなっていくんでしょうね。

流行りの研究だけを集めれば「先端」なのか

中村：我々はこれから先どこへ行くのか。「先端」ならとにかく最先端の研究を集めてやればいいという考えでは、判断を間違えたと後追いになってしまう可能性があるとは私は思っています。流行りの研究しかやらないというのが、おそらく一番危険ではないかと。最先端を創り出せるだけの基礎と広い視野を持って、さあ時が来たぞ、というときにはバーンっと出せるような状態が理想なのではないでしょうか。

神崎：広報誌86号のリレーエッセイ『先端とは何か』で「中継ぎの先端研究」ということを書きました。先端と中継ぎは一見異なるものですが、私は、先端とは、ある面において、継続していく、つなげていくこと、その中からさらに新しいものが出てくると思っています。先端研究といってもブツ切れになってしまうのは、研究として面白くない。それまでの研究を振り返りつつ、次につなげていくことが重要で、基礎研究はことさら大切になると思います。

中村：その意味では、先端研のネットワークを作りたいですね。流動性はそれ自体素晴らしいことですが、大きなプロジェクトをドーンっと立ち上げて、それが終わったら皆が散ってしまうという現状では、外に出た人たちがどこまで先端研への愛着を持っているのか、私はちょっと疑問符がつくと思うんですよ。先端研で研究してよかったというネットワーク、それはやはり先端研への愛というか、応援団になっていただくことだと思います。

神崎：私は先端研をこよなく愛しているので、先端研のためにできることは少しでも多くやりたいと思っていますよ。先端研のように広いスペースをいただいて自由に研究できる場はそうそうないかと思っています。私もラボのみんなも、本当にここで育ててもらいました。そのためにも研究者、とりわけこれから担う若い研究者が自由に研究できる環境づくりは重要ですね。一方で、文系やバリアフリー分野では、優れた業績を上げていたり、現場で結果を出して社会に貢献はしているのですが、論文がまだで学位(博士号)に至っていない方もいます。先端研では、このような体系的な基準だけは評価が難しい方を研究員として認め、先端研の研究員としてさらに研究を展開し、活躍いただけるように応援を始めました。制度面からもよい環境をつくっていききたいものですね。先端研究をつなげていける環境、そして有能な若手研究者の支援や教育、特に社会人教育は、先端研のカラーの1つにしてい

きたいです。

中村：短期的には、論文を書ける人はどんどん書いたらいいし、特許を取れる人はどんどん取ったらいい。でも、10年、20年、さらにその先を見たら、先端研が世に出す新しい学問には、やはりその研究のパフォーマンスを測る何か、客観的に納得できる指標が必要で、それを創るのが先端研の一つの重要な役目だと私は思っています。10年と任期が限られている中で容易ではないかも知れませんが、少しでも身のあるものを残したいですね、後から先端研に来る人たちにとって。この先、先端研が本当に発展し続けるために、先端研らしさを失わないために。

*1 情報文化社会分野 御厨 貴 東大名誉教授・先端研客員教授。御厨研究室の研究については本誌P6に掲載。

*2 先端研の分野横断型プロジェクト。詳細は本誌P9に掲載。

*3 政治行政システム分野 牧原 出 教授

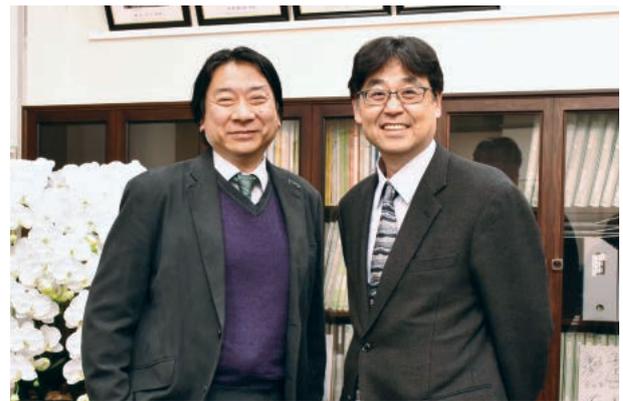


▲記念写真の撮影前に、なぜか照れている二人

対談を振り返って

『喧研諤学』の最終回として、中村尚広報委員長と「先端研のかたち」について日ごろ思うことを語り合いました。いつもはインタビューアとして聞き手に回りましたが、今回はだいふ話もさせていただきました。先端研は、「今、そして未来」について語ることができる、それだけ他を圧倒するポテンシャルを秘めていることを今回の対談を通して改めて実感しました。このポテンシャルをいかに有効に活用するかは、従来の思考から乖離した手立てが必要かもしれません。この連載を通して、みなさんの思考をシフトするようなきっかけを提供できたとすばうれしく思います。12回にわたり『喧研諤学』をご愛読いただき、ありがとうございました。

所長 神崎 亮平



▲バッチリとキメたツーショット。対談の楽しさが表情に出ていました。

『喧研諤学』が本になりました！

広報誌に掲載しきれなかった内容を完全収録。

先端研の研究者たちが、日常の仕事や生活でどのような壁にぶつかり、どのようにそれを打ち破ってきたか、普段語られることのない貴重なストーリーが詰め込まれています。

『ブレイクスルーへの思考 東大先端研が実践する発想のマネジメント』

本体価格 2,200円+税 上製 四六判 256 頁
東京大学出版会



オーラル・ヒストリー： 人の記憶を記録する

生活を変える政策が決まる。大きな課題に向けて政府が動く。情報公開された公文書や報道で知る事実の舞台裏では、多くの人たちが考え、動いています。公の人の公の体験について専門家集団が聞き、口述記録をつくる米国流『オーラル・ヒストリー』を日本で展開した第一人者を訪ねました。

記録に残らないプロセスや背景を聞き出す

政治家の後藤田正晴元副総理、宮澤喜一元総理から読売新聞グループの渡邊恒雄氏、元セゾングループ代表の堤清二氏など、名だたる政財界人のオーラル・ヒストリーを手がけた御厨貴 客員教授。そんな質問の名手へのインタビューは、著書『質問力』に習い、幼少期についての質問で始めてみた。お生まれはどちらですか？「東京生まれ、福岡育ち。親の転勤で小学校時代は福岡市で過ごした」が、これが強烈なある種の国際体験だったという。「昭和30年代初めの東京からの転校生なんて、まさに言葉いじめの対象。こっちも言葉がわからないから、まずは遊びの仲間に入れてもらえるように言語(博多弁)を習得し、次にどうやって異文化の中で生き抜くかを考え、相手のクセを飲み込んでうまく議論を進める術を身につけた。福岡の6年間で国際政治を学んだようなものかな」と笑う。オーラル・ヒスト

リーの中でも御厨客員教授が多く手がけるエリート・オーラルと呼ばれるジャンルは、政治家や官僚など、公には多くを語らない人たちが相手だ。著書を読むと、何よりその辛抱強さに舌を巻く。粘って、粘って、粘り続ける。「まあ、福岡での体験が影響しているのかもしれないね」。

御厨客員教授がオーラル・ヒストリーに出会ったのは米国での研究員時代。その後90年代に日本で独自に展開した。「米国で驚いたのは、“オーラルヒストリアン”なる職業がある、つまりそれで食べて行けるということ。米国の役所は市長などのトップが変わると部下もごっそり変わるので、辞める前にオーラルをやって残しておかないといけない。『〇〇州水道局のオーラル・ヒストリー』なんてものが普通に存在する。例えば、水道管事故が起こったら、どの市長のときに何をしたかをオーラルで調べる。また、米国は訴訟社会だから、記録は訴訟対策のひとつでもある」。米国では大部分のオーラルヒストリアンは

「オーラル・ヒストリー」とは？

公人や個人の体験について、本人が自由勝手に述べるのではなく、
専門家集団がインタビューを行って記録・分析し、一般に公開して利用されるもの。

オーラル・ヒストリーは大きく分けて2種類

エリート
オーラル

政治家や官僚など公的な地位にあった人の記憶を
国家の財産として残すもの

なぜ公人の
証言を得るのか？

IT化の影響で公的な書類が電子化され、
原案と完成案だけが残る(下手をすれば原案なし)

✓ そもそも歴史として残りにくい
マイノリティ、技術者、女性など
を対象にしたもの

✓ 対象者の人生全般について聞き
とる形態で、社会学的な方法
として用いられてきた

ライフ
ヒストリー

現在は、「歴史を回顧する」という意味を越えて、
今後の意思決定、将来の政策選択の基盤にオーラル・ヒストリーが使われている

万人へと開くために、保存と公開(アーカイブ)が重要

参考:『オーラル・ヒストリー入門』(2007, 御厨 貴)
『日本におけるオーラルヒストリー』(2006, 清水 唯一朗)

企業に雇われているが、日本で職業的に行うことは厳しいという。「連綿として続いている日本企業は、過去の意思決定過程や背景を“組織内の常識”として継承し、記録しておく文化がない。オーラル・ヒストリーが本業の一部という意識ではなく、どうしても社史編纂みたいになってしまう」。

『オーラル・ヒストリーの学校』が育てるもの

オーラル・ヒストリーは1人につき1回約2時間、10回程度の聞き取りを行う。政策研究大学院大学時代にC.E.O.オーラル・政策研究プロジェクトを率いた際には、政治家、官僚から行政、法曹、経済、労働関係など5年間で150人以上のオーラル・ヒストリーを行った。「ほぼ毎日異なるオーラルをやって、ヒーヒー言ってたなあ」と笑う。しかし、高圧的と思われる政治家や官僚から2時間×10回も話を聞くのは苦痛ではないのだろうか。「そんなね、政治家だって人間なんだから、2時間も高圧的だったら疲れるよ(笑)。最初はこっちの出方を見るために言葉のピンタが飛んでくるけど、そこをフラフラ〜と生き延びれば、後は大丈夫」。長年オーラル・ヒストリーを行い「人間というものを勉強し、人間とはこんなものだとわかるようになった」という。「昔、絶対に話さないという元通産省官僚に、にじり寄ってしがみついて、やっとオーラルをやったことがあってね。話す気のない人が腹を決めてトコトン話したら、これがものすごく面白かった。後日もらった彼からのメールには『話をして胸のつかえが取れた。あの政策に携わっていた間は何かがおかしいとっていて、敗北感を持って戦列から離れた。二度と振り向きたくなかった。絶対にイヤだったけれ



▲先端研分野横断型プロジェクト『震災アーカイブプロジェクト』にはさまざまな分野の研究者が集まる。



▲18歳選挙権について質問をする高校生の言葉に耳を傾ける御厨客員教授

研究者の横顔

「今日もマイク1本ですが」。講演でも、先端研を訪れた高校生への講義でも、人前で話す際にスライドなどのプレゼン資料は一切使わない。マイク1本なのに思わず引き込まれてしまう話は、ときに噺家のようなものである。2016年度から月に一回、先端研カフェで開かれている御厨研究室主催の『政治寄席・先端政治学カフェセミナー』には、“放談亭 タカボン”として出演している。

オーラル・ヒストリーの話をするときの表情が、本当に楽しそうなのが印象的だった。「好奇心の塊だから、誰に対しても『この人はどんな人なんだろう?』」と思い、聞いてみたくなる。経験を積んでますますその気持ちが増えた」と言う。これはもう、ぜひ再開しましょう！オーラル・ヒストリーの学校を。



御厨 貴 客員教授 Takashi Mikuriya

博士(学術)。1975年3月東京大学法学部卒業。東京大学法学部助手、東京都立大学教授、ハーバード大学客員研究員、政策研究大学院大学教授等を経て、2002年12月より東京大学先端科学技術研究センター教授、2012年4月より現職。2012年6月、東京大学名誉教授。東日本大震災復興構想会議議長代理、復興庁復興推進委員会委員長代理、くまもと復旧・復興有識者会議座長代理、天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議議長代理などを歴任。

ど、話して腑に落ちた。これで前に進める』と書いてあった。不思議なことに、オーラルをやると清々しい顔で帰る人が多いね」。著書『オーラル・ヒストリー入門』でも触れているが、オーラル・ヒストリーにはセラピー効果のようなものがあるのかもしれない。「話している人だけでなく、聞いているこちら側も作成過程で豊かになるんだよ」。

2004年度から4年間、御厨客員教授は先端研で『オーラル・ヒストリーの学校』を開いた。オーラルを学び論文に使いたい研究者、携わっているプロジェクトが難航して悩んでいる女性、祖母の被爆体験を残したい若者、患者の気持ちを知りたい医師など、多種多様な受講者が専門家の講義を受け、実習をしながら個々のテーマでオーラル・ヒストリーを行い、最終日に報告会で発表する。「これが本当に素晴らしくてね。いやあ、聞いて感動するんだよ」。人が人のことを聞く、そのごく当たり前の行為が日本では随分とおざなりにされてきたが、学校の運営を通して、人と人との相互作用の中から新しい何かが生まれる予感があったという。「オーラルの学校を制度化することは、今でも夢だな。うん」。当時あまり知られていなかったオーラル・ヒストリーだが、現在は認知されている。「オーラルの教育の仕方についても、以前とは考え方が変わってきた。人の話を聞いて記録を残すことは、昔とは別の意味で、この先すごく重要になると思う」。

今後のために、震災の記憶を記録し、活用する

御厨客員教授は、オーラル・ヒストリーを日本で展開する際に「公人の、専門家による、万人のための口述記録」と定義した*1。「オーラルは人間の記憶を記録すること。記憶をどうやって記録し、いかに有効に活用できるか。そのためには、体系的に残すことが重要」だという。東日本大震災が起きた2011年には、先端研で分野横断プロジェクト『震災アーカイブプロジェクト』を立ち上げた。東日本大震災復興構想会議の議長代理を務めた際、現地を歩き、震災の記憶を後世に残すことの大切さを改めて感じたという。しかし、立ち上げの理由はそれだけではない。「どんな研究者であろうと、3.11の大きな経験は自分の研究の何かに影響を与えているはず。社会科学の研究者は累計的に受け止めるが、理系や工学系は認知する能力が文系とは違うと感じていたので、そこを聞いてみたかった。“こんな事態なのに何も残らないこの状況を、アーカイブする必要があると思いませんか？”と、先端研の研究者一人一人に問いかけたら、みなさんが極めて積極的に話をしてくれた。“自分の専門分野でもないし、放っておくとそのままになってしまうけど、このことって何かつながりがありますよね？”と。私はそれを掘り起こした。先端研は理系の研究所でありながら特定の専門に特化せず、異なる分野が共存して



▲『震災アーカイブプロジェクト』を共に展開する牧原出教授(政治行政システム分野)と、御厨研究室にて



◀月1回開催『政治寄席：先端政治学カフェセミナー』のポスター

いる環境がとてもいい。だから、社会科学の私から問いかけたとき、実にさまざまな視点での興味深い話が出てきた」。15名の先端研研究者へのインタビュー、5名が同行した現地調査、外部有識者へのヒアリング及びディスカッションを調査報告書としてまとめ、復興庁での検討における基礎資料として提出した。「そろそろ終わりかな、と思っていたときに熊本地震が起きた」。東日本大震災に続き、くまもと復興・復興有識者会議議長代理になった御厨客員教授は、東日本大震災の経験を踏まえ、「震災アーカイブは、文字で書かれたものだけでなく、映像や写真といったビジュアルで残すことが必要」だという。現在は牧原出教授と共に『熊本震災アーカイブプロジェクト』を展開。「熊本とは、アーカイブのみならず、先端研の研究者が持つノウハウを活用して復興に協力したい。熊本は多くの企業を誘致している。今後は共同研究の可能性もある」。記憶を記録し、後世に残し、利活用するオーラル・ヒストリーが、新たな活動の機会を生み出す。「書き起こすだけなら、人が行う意味はない。身振り手振り、間といった相手の空気を感じながら、文字には残らないものを見る力・感じる力、そして何を問い、どう見極めるかという力は、これからの時代こそ重要になる。うん、やっぱりもう一度つくろう、オーラル・ヒストリーの学校を」。

*1 御厨 貴『オーラルヒストリー 現代史のための口述記録』中公新書 2002年

そこが知りたい！ 分野横断型プロジェクト『先端研・震災アーカイブプロジェクト』

2012年9月、御厨客員教授主宰の所長直轄プロジェクトとして発足。

さまざまな分野の先端研研究者が集結し、東日本大震災に関する各種の情報の記録・活用・保存を共通コンセプトに、震災アーカイブと文化の持続可能性に関わる活動を継続的に実施。

2016年の熊本地震発災後は、御厨客員教授の仲介により、復興支援のための連携を強化している。

『東日本大震災アーカイブプロジェクト』

2012年11月～12月 先端研研究者(15名)へのインタビュー

田中敏明特任教授、浜窪隆雄教授、福島智教授、渡邊克巳准教授、熊谷晋一郎特任講師、生田幸士教授、岩崎晃教授、児玉龍彦教授、中村尚教授、玉井克哉教授、廣瀬通孝教授、西村幸夫教授、中邑賢龍教授、巖淵守准教授、飯田誠特任准教授（職位は2012年当時）

2013年2月10日 東北現地調査

2013年3月11日 復興カフェ開催

2013年3月29日 復興庁に調査報告書を提出

2014年6月1日 駒場リサーチキャンパス公開にてパネルディスカッションを開催



先端研研究者6名による東北現地調査の様子

2014年6月以降 現地調査、外部有識者を招いてのアーカイブに関するディスカッション等を継続的に実施

『熊本地震アーカイブプロジェクト』

2016年5月18日 御厨客員教授による現状報告、ディスカッション

2016年9月12日 熊本現地調査

2016年9月12日 蒲島熊本県知事との懇談

2016年11月12日 現地調査報告、ディスカッション

昆虫機能を再現した匂いセンサ・探索ロボット、VRを使用した防災体験・アーカイブや観光誘致、バリアフリーの視点から見た仮設住宅のアクセシビリティ、地域住民をつなぐマッチングサービスなど、さまざまなアイデアが提案され、今後の展開について熱いディスカッションが繰り広げられた。



蒲島熊本県知事との懇談会にて



ディスカッション終了後も議論が盛り上がった

2017年以降も継続的に活動を実施

先端研ボード会議を開催

先端研では、運営全般に関して助言及び評価を行う諮問機関として「先端研ボード」を設置しています。本年度のボード会議は11月9日に開催されました。神崎所長就任後初めての開催ということもあって、和やかな雰囲気の中、ボードメンバーの自己紹介から始まりましたが、今の時代における先端研の存在意義や、社会・地域との連携において先端研が果たす役割、先端研の存在やその取組を社会に認知してもらうための方策などについて率直な意見交換が行われました。また、第5期科学技術基本計画が掲げるSociety5.0の推進や、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピック競技大会に向けた先端研への期待も述べられるなど、今後の組織運営に刺激と元気をいただいた会議となりました。(経営戦略企画室)



▲神崎所長新体制での先端研の運営について、活発な議論が行われた

先端研・(株)日立製作所連携 「日立東大ラボ開所記念セミナー」開催

11月16日、東京大学と(株)日立製作所が今年6月に開所した「日立東大ラボ」と先端研とのさらなる連携を図るため、「日立東大ラボ開所記念セミナー」が先端研にて開催されました。先端研からは情報、エネルギー、バリアフリー、社会科学など先端研の特色である多種多様な分野の研究者が参加し、総勢70名を超える参加者が今後の連携に向けて交流を深めました。

先端研・中邑賢龍教授(人間支援工学分野)、総合文化研究科・金子邦彦教授、総合文化研究科・植田一博教授の研究紹介からはじまり、パネルディスカッションでは、神崎亮平所長をモデレータに、先端研、(株)日立製作所双方のパネリストが研究強化や人材育成に向けた大学と企業との新たな連携の在り方について活発な議論を交わし、両者にとって実りのある有意義なものとなりました。

(経営戦略企画室:小倉 優太)



▲パネルディスカッションの様子

先端研30周年記念ウェブサイトを公開 OB・OGの方、先端研の思い出をお寄せください

1月16日に先端研設立30周年記念ウェブサイトを公開しました。「先端研ヒストリー」では、30年の歩みをまとめた年表と、航空研究所から理工学研究所、宇宙航空研究所時代を含めた先端研設立までの歴史を紹介し、「フォトギャラリー」では、30周年を迎えた先端研の“今”を、研究室の様子や先端研の四季などの写真で綴っています。フォトギャラリーでは、30周年記念冊子の撮影と併せて随時写真を追加していきます。また、「私と先端研」では、OB・OGの方を対象に先端研に関する写真やエピソードを募集しています。ぜひ、奮ってご投稿ください。コンテンツは今後も追加されますので、お楽しみに。



▲先端研30周年記念ウェブサイトトップページ

内閣官房オリパラ事務局と先端研が『大学 meets 当事者研究』を協力開催

11月23日、内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局と協力し、『大学における「心のバリアフリー」ワークショップ・大学 meets 当事者研究』が先端研にて開催され、学生や教職員、障害者の115名が参加しました。「能力主義・競争原理とどう付き合うのか」をテーマに、発達障害当事者の綾屋紗月特任研究員(先端研・当事者研究分野)、熾烈な能力・競争世界を経験した女子バスケットボール元日本代表の小磯典子選手、当事者研究の発祥の地「浦河べてるの家」、依存症の当事者研究で有名な「ダルク女性ハウス」の講演が行われ、その後、参加者は当事者研究の手法を使って自分の苦勞の構造や意味を発見し、苦勞との付き合い方を見つけていくプロセスを体験しました。また、開催前の会場ではパラリンピックの公式競技であるボッチャ体験会も行われました。



▲講演する女子バスケットボール元日本代表の小磯典子選手



▲ボッチャ体験会にも多くの人が参加した

異才発掘プロジェクト『ROCKET』第3期生 オープニングセレモニーを安田講堂で開催

「異才発掘プロジェクトROCKET」がスタートして3年目となる12月19日、第3期オープニングセレモニーが安田講堂にて開催されました。

ROCKETはユニークな子どもたちの居場所を作ることでイノベーションの種を生み、多様な学びや生き方を受け止める社会の創出を目指しています。これまで特異な興味を持った子どもたちが活動から学ぶプログラムを実施してきましたが、その先には彼らが好きなことを仕事にして活躍する時代がくると考えています。オープニングセレモニーではその一例として、ゲーム好きの子どもたちがオンラインゲームの「マイクラフト」で文化財を再生するというプロジェクトを紹介し、リアルとバーチャルを繋げる未来の仕事の可能性についても議論しました。

(ROCKETプロジェクトリーダー:特任研究員 福本 理恵)



▲ROCKET第3期生



▲「マイクラフト」での文化財再生プロジェクトを紹介する中邑賢龍教授

人事情報 H R

採用・任命・転入等

発令日	氏名	職名	受入研究室
2016年12月1日	JEHL ZACHARIE VICTOR SAMUEL NATHANAEL	特任助教	岡田研究室

退職・転出

発令日	氏名	職名	転出先
2016年11月30日	PEIRIS Theige Anton Nirmal	特任研究員	
2016年12月15日	栢沼 愛	特任研究員	筑波大学 助教

受賞 W I N N I N G

2017年1月23日

稲見 昌彦 教授(身体情報学分野)が、2016年度高柳健次郎業績賞を受賞
業績内容:情報空間におけるインタラクション技術に関する先進的研究

2016年10月31日～11月1日

飯田 誠 特任准教授(エネルギー環境分野)が、WWEC2016にてBEST POSTER AWARDを受賞
受賞タイトル:A study of turbulence and gust by the LES wind simulation of the complex terrain with the atmospheric stability

2016年11月10日

石北研究室(理論化学分野)の須藤 英輝さん(工学系研究科応用化学専攻修士学生)が、CREST「ファイバーレス光遺伝学による高次脳機能を支える本能機構の解明」第1回領域研究会において優秀ポスター賞を受賞

活動報告 R E P O R T

[プレスリリース] <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/pressrelease/>

2017年2月9日

油谷 浩幸 教授(ゲノムサイエンス分野)
◇ゲノム医療研究プロジェクト始動

2017年1月24日

岡本 晃充 教授、山口 哲志 講師(生命反応化学分野)
◇望みのタイミングでスイッチオンする生体分子検出法を開発
～さまざまな病気に関わる細胞膜上のラフト構造の環境選択的な観察が可能に～

2017年1月19日

中村・近藤研究室(人間支援工学分野)
◇ICTを活用して障がい児の学習・生活支援を行う「魔法のプロジェクト2017～魔法の言葉～」協力校を募集 ～新たに人型ロボット Pepperの導入により、児童・生徒の特性に合わせた支援を強化～

2016年11月18日

中村・近藤研究室(人間支援工学分野)
◇ICTを活用して障がい児の学習・生活支援を行う「魔法のプロジェクト2016～魔法の種～」の成果報告会を開催 70の協力校の中から25校の事例を紹介

[研究成果]

2016年12月16日

岡本研究室(生命反応化学分野)
◇細胞の機能の初期化に関わるDNA修飾を測る新手法を開発 ～タングステンを使い、一工程で配列解析が可能に

2016年12月16日

山下・セット研究室(情報デバイス分野)
◇林學生日本学術振興会特別研究員が、東京工業大学の水野洋輔助教、中村健太郎教授との共同研究により、光ファイバーセンサーの超高速化に成功

2016年12月6日

浜窪 隆雄 教授(計量生物医学分野)
◇横浜市立大学大学院医学研究科 高橋 琢哉 教授、竹本研助教の研究グループ、東京大学先端科学技術研究センター 浜窪 隆雄 教授、大阪大学産業科学研究所 永井 健治 教授の共同研究により、トラウマ記憶を光操作により消去する新規技術の開発に成功

2016年11月29日

中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)
◇川崎市が、先端研人間支援工学分野、NPO法人ピープルデザイン研究所と協同で、自治体として初めて「短時間の雇用・就労」の実現に向けた取組を開始

2016年11月29日

近藤 武夫 准教授(人間支援工学分野)
◇ソフトバンク株式会社、近藤 武夫 准教授監修の「ショートタイムワーク制度」の導入ガイドを公開

[テレビ・ラジオ出演]

2017年1月18日

テレビ朝日◇報道ステーション「異才」発掘プロジェクト、不登校の天才少年画家
◇中邑 賢龍 教授(人間支援工学分野)

2017年1月11日

テレビ朝日◇報道ステーション◇今季最強の寒波に絡めて、温暖化が進行した将来の寒波について解説◇中村 尚 教授(気候変動科学分野)

2017年1月8日

NHK BSプレミアム◇日本アニメ100～アニメ100人くらいに聞きました～◇稲見 昌彦 教授(身体情報学分野)

2017年1月7日

BS-TBS◇夢の鍵: 光で水殺菌! 世界の子どもを救いたい◇小熊 久美子 准教授(共創まちづくり分野)

2017年1月1日

NHK Eテレ◇新世代が解く! ニッポンのジレンマ 2017元日スペシャル◇佐藤 信 助教(政治行政システム分野)、ライラ カセム 特任助教(人間支援工学分野)

2016年12月22日

TBSラジオ◇伊集院光とらじおと◇稲見 昌彦 教授(身体情報学分野)

2016年12月1日

NHK総合◇首都圏ニュース845気象情報:北極海の高氷減少と日本の寒冬について解説◇森 正人 助教(気候変動科学分野)

[新聞掲載]

2017年1月26日

【化学工業日報】東大 生体分子検出法を開発 機能食材などに応用期待◇岡本 晃充 教授、山口 哲志 講師(生命反応化学分野)

2017年1月25日

【中部経済新聞】心の風景 五輪・パラという“災害”アスリートの痛み知って◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2017年1月23日

【朝日新聞】東大先端研で報告会 ITで障害時支援探る — 魔法のプロジェクト 2016魔法の種◇中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)

2017年1月22日

【日本経済新聞】減る北極氷 日本に寒風 海の熱で大気の流れ変化◇森 正人 助教(気候変動科学分野)

2017年1月21日

【読売新聞】知財高裁大合議部 抗がん剤 後発薬特許認めず◇樹田 祥子 准教授(知的財産法分野)

2017年1月13日

【日経産業新聞】iPSから素早く 細胞1個単位で簡単選別 東大、光で分解のゲル活用◇山口 哲志 講師(生命反応化学分野)

2017年1月12日

【読売新聞】北極海気象データで寒波の予測精度向上◇中村 尚 教授(気候変動科学分野)

2016年12月28日

【日刊工業新聞】超モノづくりへの挑戦:昆虫科学が拓く新しいモノづくり◇神崎 亮平 教授(生命知能システム分野)

2016年12月24日

【東京新聞】考える広場:頼る仲間広げ連帯を -「不要な存在」になる不安 - ◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2016年12月8日

【日本経済新聞】「1強国会」課題残す 数の力で採決強行、審議不十分◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2016年11月24日

【読売新聞】◇スクールデイズ 障害のある人との出会い◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2016年11月20日

【神戸新聞】◇鉄禁輸に市民決起(遙かな海路 巨大商社・鈴木商店が残したものの第3部 頂点に立つ 25)◇佐藤 信 助教(政治行政システム分野)

2016年11月17日

【電気新聞】◇デジタル化の行方 コスト削減から価値創造へ◇森川 博之 教授(情報ネットワーク分野)

2016年11月13日

【日本経済新聞】◇進化する生物模倣「かすかなニオイ検知し人命救助」◇神崎 亮平 教授(生命知能システム分野)

2016年11月11日

【朝日新聞】◇障害ある子の進学、支えて10年 東大のプログラム、70人が大学へ — DO-IT Japan◇中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)

[雑誌掲載]

2017年1月11日

【月刊Journalism】2017年1月号 no.320
◇特集「展望2017」:<政治>首脳交代で国際社会に変化の波 問われる危機吸収メカニズムの真贋◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2017年1月1日

【AXIS】vol.185
◇人機一体がスポーツの概念と環境を拡張する◇稲見 昌彦 教授(身体情報学分野)

2016年12月16日

【日経ビジネス】2016年12月19日号
◇次代を創る100人:[寄稿]DECIDERムハンマド・ビン・サルマーン◇池内 恵 准教授(イスラム政治思想分野)

2016年12月9日

【月刊Journalism】2016年12月号 no.319
◇政治をつかむ:政権交代が可能な政治に必要な学びあい 個性も生かす政権運営 断絶と継承を見抜く報道に期待◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2016年11月15日

【国際問題】2016年11月号No.656
◇「[大国エジプト]の没落と再興 紅海岸諸国の雄としての台頭」◇池内 恵 准教授(イスラム政治思想分野)

2016年11月4日

【文藝春秋】文藝春秋オピニオン 2017年の論点100
◇テロの世界的拡散 その先には何があるのか◇池内 恵 准教授(イスラム政治思想分野)

新 刊

BOOK

『糖尿病 研究の“いま”と治療の“これから”』

綿田裕孝/編;酒井 寿郎 [ほか] 著/羊土社/2017.01 刊

『生きたかった 相模原障害者殺傷事件が問いかけるもの』

藤井克徳、池上洋通、石川満、井上英夫 編(2「相模原障害者施設殺傷事件に潜む「選別」と「排除」の論理」を福島 智 教授が執筆)/大月書店/2016.12.20 刊

『ブレイクスルーへの思考

東大先端研が実践する発想のマネジメント』

東京大学先端科学技術研究センター、神崎 亮平 編/東京大学出版会/2016.12.22 刊

『体験的ライフタイム・ホームズ論 車いすから考える住まいづくり』

熊谷 晋一郎 [ほか]著/彰国社/2016.11 刊

先端研ウェブサイトでも最新の活動状況をご覧ください

2017年 先端研 30周年

2016年10月、2017年に設立30周年を迎えるにあたり、30周年記念事業実行委員会が立ち上げられました。駒場リサーチキャンパス公開ワーキンググループおよび広報委員会メンバーも加わり総勢20名以上が、30周年記念事業のさまざまな活動を行っています。

先端研30周年記念事業実行委員会メンバー

委員長:中村 尚 教授 副委員長:牧原 出 教授、小熊 久美子 准教授

田中 久美子 教授	[キャンパス公開WG]	[広報委員会]
近藤 武夫 准教授	宇佐見 康二 准教授	岡田 至崇 教授
佐藤 信 助教	道畑 正岐 助教	高橋 哲 教授
玉置 亮 助教	森 正人 助教	池内 恵 准教授
堀内 恵子 助教	長越 柚季 助教	巖淵 守 准教授
相見 治義(事務部)	佐藤 純 助教	ティクシエ三田アニエス 准教授
奥 雄一(事務部)	野口 篤史 特任助教	谷内江 望 准教授
江崎 順子(事務部)	六角 美瑠 特任助教	セット ジイヨン 准教授
狩野 真二(事務部)	小倉 優太(経営戦略企画室)	
三ヶ尻 浩生(事務部)		
中井 麻祐子(事務部)	[オブザーバー]熊澤事務長ほか事務部、広報担当	



2016年10月9日に行われたキックオフの様子

30周年記念シンボルマークを公募

ウェブサイト、ポスターなどで募集を告知

- 募集期間:2016年9月8日~11月7日
- テーマ:先端研力が人と社会をつなぐ。新しい未来のかたちをつくる。
- 対象者:先端研の教職員・学生・研究者(特任・非常勤・協力、かつて在籍していた方も含む)及びそのご家族

30周年事業実行委員会にて審査

2016年12月7日、30周年記念事業実行委員会にて応募案を審査。決定後、最終デザインへの調整などを検討。



告知ポスター



審査の様子

決定！先端研30周年記念シンボルマーク



[デザインコンセプト] Tensegrity (テンセグリティ)

常に新しく、多様な研究が相互に影響し、最適な融合とイノベーションが起きている先端研の様子を「テンセグリティ」で表現しました。テンセグリティを構成する30本の軸材は、先端研で行われている多様な研究を、軸材をつなぐロッドは研究間で相互に及ぼされる影響力を示しています。



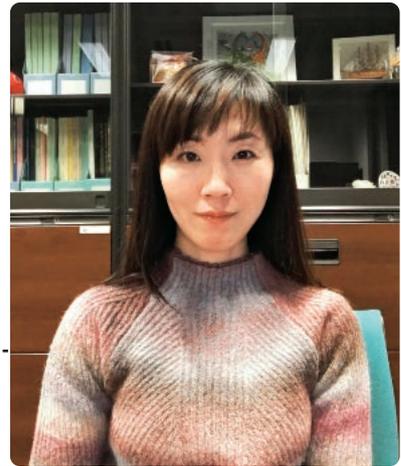
作者の安井謙介さん(左)、神崎陽平さん(右)

ご応募いただいた方には、感謝の気持ち『先端研キットカット』を差し上げました。たくさんのご応募と公募情報のシェアを、ありがとうございました！



先端とは何か

知的財産法分野 榊田 様子 准教授



“先端”とは、未来との接点である。

今から15年くらい前、弁理士として企業で働いていた頃、私にとっての「先端」とは、日々、研究者・技術者から上がってくる発明について、特許権としての権利範囲を言葉で形にする、その部分のことでした。法律に照らし合わせて、ここから先は「先端」である、という境界を見極めるのが私の役割でしたが、先行する技術との比較において、発明者の見方では、特許法という新規性や進歩性を見出すのが難しく思える場合でも、切り口をかえると「先端」となり、うまく特許権にできることもありました。私は、この仕事の経験を通じて、科学技術(発明)に対する様々な見方を学びました。科学技術の「先端」というのは、見方や対象によって、そう見える場合もあれば、そう見えない場合もあるということを経験したのです。

現在、私は、先端研の中で、知的財産法分野に属する研究をしています。知的財産法で保護すべき対象をどのように法律で規定するか、つまり、上述したような「先端」部分の法的取扱いは、大きな興味の一つです。特許制度では、「先端」に辿り着いた者に対して、その内容をいち早く皆に開示することを条件に、一定期間、「先端」部分に独占権を与えます。そうすることで、世の中で、「先端」と呼ばれる科学技術のほとんどは、秘密にされることなく、広く具体的に公開され、技術の累積的進歩が促され産業が発展する仕組みになっています。他方、一定期間とはいえ(現行法では特許出願日から20年間)、特定人に独占権を与えることは、対世的な影響が大きいため、色々な工夫や配慮が必要となります。

科学技術は絶えず進化し、その「先端」は、大なり小なり時々刻々と変化しており、時には、既存の特許制度で予定されている範疇から飛び出ることもあります。例えば、今、医療技術分野では、「細胞」の取扱いが問題になっています。再生医療には「細胞」が不可欠ですが、人為的に得られた「細胞」の特定(または同一性の判断)は、技術的にも文言的にも難しく、特許制度上、これまでの医薬品等の技術と同列に扱おうとしても、全くうまくいきません。あるいは、将来的に、AI医療が発展すると、「AI」自体やその医療への応用は、新たな法的定義を与えることが必要となるでしょう。新たな科学技術(この場合は「AI」)について、適切な法規制を構築するためには、社会への将来的な影響(例えば、「AI」により、医療行為者の概念が変わるなど)を、よく考えないといけません。基礎となる科学技術は、社会で実用化される数十年前に誕生するのが一般的ですから、それらの「先端」が、どのような未来社会を生み出していくのか、しっかりイメージする必要があります。

すなわち、私にとって、「先端」とは、未来との接点である、ということが出来ます。それは、科学技術そのものにおいても、社会を構成する法規制においても、同じです。科学技術の進歩とともに、社会や法規制も変化していきます。様々な視点をもって、「先端」をしっかりウォッチしていきたいと思っています。

物理現象の測定を ブラックボックスにしない

たまき りょう

玉置 亮 さん 岡田研究室(新エネルギー分野) 助教

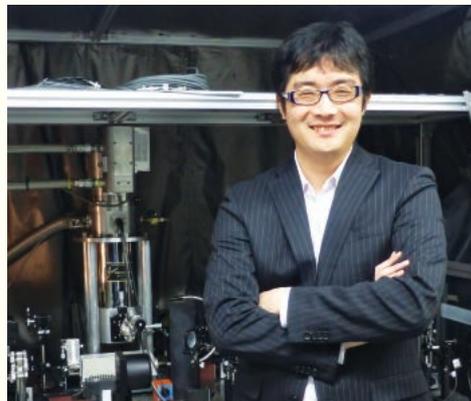
茨城県生まれ。上智大学理工学部物理学科卒業、東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻博士課程修了。博士(工学)。NEDOプロジェクト「超高効率・低コストⅢ-V化合物太陽電池モジュールの研究開発」では量子ドット・マルチバンドによる超高効率セルの開発を担う。実は先端研歴10年。

「ブラックボックスが好きじゃないんですよ。なぜその現象が起こるかに興味があるので」。ブラックボックスとは、測定装置のこと。玉置助教が所属する岡田研究室は、次世代太陽電池である量子ドット太陽電池研究で世界のトップを走る。「太陽電池をつくる人・測る人・考える人の三位一体で研究していて、僕は「測る人」です」。

次世代太陽電池の課題の1つは変換効率をいかに上げるか。そのためには「変換効率の測定より太陽電池の内部で何が起きているかを測ることが重要」だが、一般的な太陽電池とは異なり、次世代は現状では低温下で実験が行われる。「何千万円もする測定装置もありますが、既存の装置は測定方法が決められていて、僕たちのオリジナルな実験では役に立たないし、太陽電池の中で起こっている物理現象を見ることもできません。

だから測定装置をカスタマイズして可視化します」。

測定は主に超短パルスレーザーでの分光測定を行う。玉置助教は、学部時代から継続して光測定に携わってきた。学部ではハイブリッド系、大学院ではセラミックス系と測る対象は変われど「光を当てる対象物には、さほどこだわりはない」のだそうだ。「効率を上げるために何をしたらいいかは、闇雲につくってもわかりません。なぜその結果が出たのかがわかれば、次のステップもわかる。僕は「つくる人」ではないので、自分ががんばったからといって高効率太陽電池ができるわけではないですが、現場では、測る装置がよくないといい結果も出ません。ものづくりで困っているときに助言ができればベストです」。測定方法を考えるのが最も難しく、最も面白い。測定結果が何を意味しているのかを解釈



「脂肪が増えて困っています、と書いておいてください」と笑いながら、写真撮影に応じてくれた。

するのもまた難しく、それもまた面白い、と楽しそうに話す。

直近の目標はNEDOプロジェクトの達成だが、対象にこだわらず、面白そうなものを測っていきたいという。「最先端の研究現場では、いくら高価な装置を導入しても、既成の装置では自分たちが求める測定はできないとわかっている。装置を自作する傾向にあります。お金だけで解決できることは、すでにどこかで誰かがやっている。科学技術は二番ではダメです。そのためには「どのようにして測るか」の工夫が必要で、そこを大きな意味で自分の研究にしたいと思っています」。

趣味の読書では、文学以外の小説をもっぱら「キャラ読み」する。「主人公がどう動くのかを楽しむ」一種の人間観察らしい。変化を見ることへの興味は、生まれ持ったものかもしれない。

編集後記



広報委員 巖淵 守 准教授
(支援情報システム分野)

来年度30周年を迎える先端研での記念事業の準備も本格化してきました。記念事業にあわせて本広報誌の編集委員も、先端研のユニークさを一層外部の方々に向けて情報発信できればと願っています。今の先端研を紹介する対談「喧研講学」も今回の号で最終回を迎えましたが、書籍となり、さらに多くの方々を読んでいただければと願っています。新たな10年を迎えるのに先立ち、20周年記念事業の中心の一人として先端研ヒスト

リーをまとめられた御厨客員教授に登場いただき、文字には残らないものを感じ、何を問い、どう見極めるかの力が今後重要と語っていただきました。IoTやAIなど、様々な情報を効率的に入手・処理できる時代の下でも得難いものごとの本質にどうせまるか、将来に向けたヒントが示されたように思います。変わり続けることを使命とする先端研が、今後もユニークな人々(大人も子どもも含めて)を集める場になればと願っています。

東京大学先端科学技術研究センターについて

2017年に発足30周年を迎える東京大学先端科学技術研究センター(略称:先端研)は、「科学と技術のハーモニーで人と社会をつなぎ、未来を形にすること」を使命とする研究所です。最大の特色は研究者や研究分野の多様性にあり、理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、基礎から応用に至る多様な研究を積極的に推進しています。

先端研ニュース 2017 Vol.1 通巻98号 発行日:2017年2月21日

ISSN 1880-540X

© 東京大学先端科学技術研究センター
転載希望のお問い合わせ
press@rcast.u-tokyo.ac.jp

発行所: 東京大学先端科学技術研究センター 〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp>
編集: 広報委員会[中村尚(委員長)、岡田至崇、高橋哲、池内恵、ティクシエ三田アニエス、巖淵守、谷内江望、セツ ジイヨン、村山育子、山田東子]

表紙写真: 2016年11月に降った今冬の初雪と13号館正面玄関(撮影:宇土 浩二)

この冊子は植物インキを使用しています。